

## 2

「品性に欠ける話ですなえ」

敦子あつこがそう云うと、益田ますだ龍りゆういち「は全く以て仰る通りと調子の好い言葉を返して来た。

「お蔭様かげさまで実に下品です。お下劣です。下等です。仕事でなけりや凡そ敦子あつこさんの前で語れるような話じゃないですね。誤解のないように云つときますけど、僕が下品なんじゃないですよ。卑怯ひきょうでひ弱で貧相ですけど、辛うじて品性だけは維持してるつもりで——」

益田ますだは神保町じんぼうちようにある薔薇十字ばらじゆうじ探偵社たんていしやの探偵である。正式には探偵助手なのだろうが、世間一般で云うところの探偵業務は主にこの益田ますだが独りひとで熟こなしている。

基本的には生真面目なまじめな男なのだと敦子あつこは判じているが、その真摯しんしさを韜晦とうかいするかのようように戯おどける癖へきがある。

シャイなのだと思う。多少は露悪志向ろあくしやうを持つているのかもしれないが、どうにも余計よなことを能く喋しゃべる。

嘘は言わないが演出は過剰だ。本人は座持ちをするために軽口を叩き続けているつもりなのだろうが、脱線することも多いから結局時間が掛かる。

「とは云え」

ネタ自体が下品なんですから上品には語れませんよと益田は云った。

「お尻を臀部と云い替えても、陰部を下半身と云い替えても、モノに変わりはない訳で、ケツメドはケツメド、オイドはオイドですからね。まあ、おケツですわ」

この辺が一言多いところである。一言どころか何言も多い。その上、どれを取つても団子屋で連発していい語彙ではない。

益田は近くの席の客が己に視軸を向けていることに気付いたらしく、右手で口を押さえた。

「失礼」

「いいですけどね。それより本題を進めて下さい。私は気にしない方ですけど、それでも、そうお尻お尻連呼されると——お店に迷惑じゃないですか」

「はあ。でも」

尻が問題ですからねえと益田は云った。

「私が協力出来るのは、お尻に関係ない方じゃないかと思うんですけど。どうなんですか？」

まあ探すのは僕なんですけどと益田は云つた。

「探し難いんです。お尻出して歩いてる人はいないですからね。禪一丁でお神輿でも担いでくれるか、お相撲でもしてくれりゃいいんですけどね。そこでまあ、品物の方から探してみようと考えたんですが、てんで五里霧中。そこでお知恵を拝借しようかと——」

そう云うのは兄貴の方が役に立つんじゃないですかと敦子は云つた。

敦子の兄は、人が知らない——というか知る必要のないことを能く識っている。

益田は伸ばした前髪を揺らして、苦笑いした。

「師匠は怖いでしょうに。それに今、何でしたっけ、東北の方の事件がこじれてるでしょう。どうせ遠からず担ぎ出されるのじゃないかと思うんですな。あの人、嫌だ嫌だと云う程に引つ張り出されるじゃないですか。どうせ出馬するなら、あの腰の重いのを改めて、最初ッから関われればいいと思うんですが、どうです？ その方が事件はとつとと終わるでしょ。あの人が行けば解決するじゃないですか」

「それはどうかしら」

兄は慎重過ぎる程に慎重な男だ。

兄が出張るから解決するのではなく、解決の目処が立ったからこそ兄は出張るのである。それに。

「栃木の事件は、兄貴も最初からいたでしよう」

「ありや事件なのかどうなのか、最後まで判らなかつたんですよ。何がどうなつてんだか、何回聞いたつて今でも解りません」

「榎木津さんの説明だからでしょう？」

榎木津は益田の勤める薔薇十字探偵社の探偵である。優秀なのだろうが奇矯な人物でもあり、物ごとを他人に順序立てて説明することなど金輪際ない。

と、云うより。

「兄貴は本屋ですよ」

端から事件を解決する謂われはない。

これは失敬と益田は戯ける。

「まあ、いずれにしても兄上様にご出馬戴くような物騒な案件ではない訳で。お化けも涌いてませんし憑き物も憑いてません。勿論、弊社の大先生だつて歯牙にも掛けませんね。不肖この益田がいつもの如くこそそこそと嗅ぎ回り姑息に収める類いの話なんです。ただ、まあ手詰まりでして。そこでお知恵を拝借と」

「私程度の浅知恵なら幾らでもお貸ししますけど、何を貸せばいいのかが解らないんですよ」

「うーむ」

益田は髪を掻き上げた。

「そこですなあ。ま、ですから最初から順を追つてご説明している訳です。この場合、尻は避けて通れないんですよ。その、尻に宝珠の刺青のある男がですね、主犯であることは間違いない訳で」

「寶石泥棒ですか」

「泥棒——なんですかね？」

「知りませんよ」

まるで要領を得ない。

敦子は皿の上の団子を弄んで、それから口に運んだ。

平日だと云うのに人通りは多い。参詣者なのか物見遊山なのか、そのどちらでもないのか、区別がつかない。

浅草である。

所謂、仲見世通りからは少し外れた、でも六区と呼ばれる地域にも入らない——要するに余り流行っていない、地味な団子屋である。それでも客は何組かいる。

浅草は俗に謂う下町である。昨今都市化が著しい東京に於て、江戸の情緒が残存していると謂う者も多い。しかし敦子はそうは思わない。

浅草に、江戸はない。

浅草は、ずっと浅草だ。千代田ちよだの城を中心に城下町としての江戸が形成され始めた頃、浅草は既に浅草としてあつた筈である。浅草は、江戸とは別の町だったのだ。

やがて江戸はその枠を拡張、浅草もその枠の中に呑み込まれてしまふ訳だが、それでも浅草は浅草だ。

浅草は能く町人の町などと謂われることがあるのだけれど、それも違ふように敦子  
は思う。徳川は江戸を整備する際、先ず高台に武家屋敷を作り、その後低地に町家を  
配して行つたと聞く。だからこそ下町などと云う呼称がある訳だけれども、浅草はそ  
の時、既に浅草としてあつたのだ。

だから、浅草は町人の町と云うよりも、武士と無関係に出来上がった町とすべきな  
のだと思う。江戸と云う、為政者によつてシステムティックに作られた都市の文化と  
は系統を異にする、芸人や職人、身分の定められない者までもを含めた雑多な人人が  
形成した文化が、この浅草と云う町の根っこにあるのではないか。

それはやがて江戸文化と呼ばれるものと融合し、江戸と云う都市そのものに干渉し  
て行く訳で、だからこそひと括りにされがちなのだが、それでも矢張りどこかで江戸  
と浅草は乖離かいりしているように思えてならない。

そうした町の出自は徳川時代を過ぎ明治大正と云う仄暗ほのくらい時代を経てもまだ、残つ  
ているように敦子は感じる。

だから、敦子は浅草を訪れる度、江戸情緒と云うよりも、何処か異国情緒めいた感触を覚えるのだ。

夏は特にそう感じる。

往來を眺めつつ、そんなことを考える。

麦茶を口に含むと、益田は大きな溜め息を吐いた。

「どうしたんです」

「依頼人がねえ。何ともその、心許なくて」

「その、依頼人と云う人は」

「ええ。敦子さん、食品模型つてご存じありませんか。あの、デパートなんかの食堂の店先で最近見掛ける、食いものの偽物なんです」

「知ってます」

去年、取材したのだ。

料理見本模型は大正の頃からあつたようだが、事業として成立したのはそう古いことではない。

調べたところ、蠟細工で作る食品模型の嚆矢は、標本や蓄電池の製作で知られる島津製作所に求められるようである。初めは食堂の料理見本と云うよりも、謂わば標本のようなものだったようだ。

詳しくは判らなかつたが、病理標本などを作っていた名人が依頼されて作ったと云うのがそもそもでもあるらしい。それが食堂の店頭を飾ったのかどうかは判らなかつたのだが、出来も良かったようだし、商用に使われた可能性は高い。大正の中頃のことである。

その後、大正の大震災で全焼した百貨店の白木屋が、事業再建の端緒として開設した食堂のショウインドウに提供する飲食物の見本を飾つたらしい。

店先に料理の見本を陳列し入店時に食券を購入させると云う販売方式は、現在では定番のスタイルと云えるのだが、当時は斬新ざんしんだったようだ。後払いの場合、災害時等には料金が回収出来ないケースが予想される。そうした緊急事態に対応するため  
の施策として考案されたようだが、同時に業務の簡易化、効率化を図るという意図もあつただろう。入店してから品書きを覽みて決めて貰もらうより、並んでいる最中に注文品を決めて貰つた方がスムーズで、客の回転率も高くなる。事実、震災復興時の食堂は長蛇の列となつていたようで、かなりの混乱があつたのだらう。

この成功を受けて、それ以降徐徐に真似をする店舗が出て来たのだそうである。

白木屋から依頼されて食品見本を作つたのは人体模型の技師だったそうで、これも確認は出来なかつたが、後追いで模倣した店の料理見本もその人物が作ったものと思われる。



食品模型をひとつの事業として成立させたのは、岩崎瀧三と云う人である。

岩崎が大阪に食品模型岩崎製作所を立ち上げたのは昭和七年のことだ。いつまでも色褪せない精巧な食品模型は大評判となった。高額ではあったが、売るのではなく貸し付けると云う業態にしたことで関西中心に業績を伸ばした。

しかし開戦を迎え、蠟の原料には欠かせない石蠟が統制品目となってしまう。大阪では料理の模型を店頭に陳列すること自体が全面的に禁止されてしまったらしい。

食品模型事業は大戦を境に完全に座礁してしまったのである。

しかし岩崎は諦めなかった。郷里の岐阜に戻った岩崎は珪藻土などを使って石蠟の含有量を極限まで減らした模型の製造法を考案すると、戦争犠牲者の葬儀供物の模型などを作ることで難局を凌いだと云う。

そして敗戦後、故郷に岩崎模型製造を設立して制作を再開、やがて大阪に拠点を戻して順調に事業を拡大、一昨年東京に進出したのである。

敦子はその東京進出を機会に、岩崎に石蠟の比率削減成功に至るまでの工程の聞き取り取材をしたのだった。

能く知つてますと敦子は云った。

「はあ、何でも知つてるところは兄妹で能く似てますね」

「取材したんですよ」

「仕事ですかあ」

「勿論仕事ですよ。一昨年、本店のある岐阜まで出向いて、社長さんにお話を伺ったんです」

東京支店は、支店とは云うものの一間しかない作業場のような処だった。東京進出と云うと華華しい感じに聞こえるが、商売を軌道に乗せるのは簡単ではないのだ。

「社長さんにですか。そりゃ僕より詳しいですなあ」

「でも、石蠟の比率を減らす工夫に就いての苦労話をお尋きしただけですから。かなりの試行錯誤があったようですよ。後は——子供の頃、融けた蠟を水に垂らして遊んでいたのが蠟細工に興味を持ったそもそももだとか、最初に作った食品模型は奥さんが作ったオムレツだったとか、そう云うことを聞いただけですよ」

なる程ねえと益田は腕を組んだ。

「苦労してるんだ社長もねえ」

「それが何か関係あるんですか？」

「いや、実はその製作所で働いてる職人さんが依頼人なんですよね。お住まいはほれ、すぐその合羽橋で。三芳彰さんと云う人なんですが——」

「名前とか云っていいんですか？ 守秘義務は——」

敦子さんは特別ですよと益田は云った。

どの辺がどう特別なのか解らない。

「その人、元元映画や舞台で使う小道具や何か作ってた人なんですよ。小さい時分から細かい細工ものが好きで、まあ手先が器用なんでしようね。で、彫金やら木工やら硝子細工やら、あれこれと試して来たけれども、蠟細工が一番性に合っていたつう訳です。まあ食品模型作りは天職だと喜んでるような人なんですけども」

「そう云う個人情報も依頼内容に関係あるんですか？」

「まあ、あると云えばありますね。その性向こそが今回の発端でして。要するに三芳さんは、その腕を見込まれた訳ですよ」

「何か作らされたんですか？」

「ですから、寶石ですね」

「模造宝石——と云うことですか？」

「模造——と云いますかね、まあ食品見本と同じ、見本と云いますかね」

「は？ 蠟細工ですか？」

「いやいやと益田は団子の串を振った。

「天麩羅や刺し身じゃないですから、寶石は蠟じゃ作れんでしょう。そこはそれ、元小道具屋ですから、硝子玉削るかなんかして作ったんでしょいな」

「それ、犯罪性はないんですね？」

模造宝石を作ること自体は犯罪ではないだろうし、模造品を模造品として売買するのであれば、それも犯罪ではあるまい。

しかし益田は悩ましげに顔を歪めた。

「あるんですか？」

「いやあ、その、三芳さんは善良な人そうですし、犯罪に加担するなんてことはいいですよ。と、云うか、三芳さんは自分が犯罪に加担するようなことになってはいけな

いと、その、依頼して来た訳でして」

何だか益々話が見えない。

「じゃあ、模造宝石の作製をその三芳さんに依頼した人物が、その刺青の男——なんですか？」

「違います」

「解りません」

より一層解らない。

まあ聞いて下さいと益田は云う。

「僕自身あまり整理出来てないもんで、結論を急かさな

いでください。ええ、その尻に刺青のある男と云うのは、その宝石——金剛石らしいですけども、それを着用した男らしいんですね」

「着服？」

「そう云つていたんだそうです。まあ、着服と謂えばネコババみたいな意味でしょうから、何らかの手段で不正に入手した、と云うことなんでしょね。で、その宝石の所為で色々大変なことになっている、人死にも出ている——と、その依頼人は云つたそうです」

物騒な話ですねと云うとまあねえと益田は一層悩ましげな顔になった。

「で、まあその依頼人の言い分ではですね、そつくりの偽物を作つて、こつそり本物と掬り替えて、宝石を本来の持ち主に返したいと、まあこう云うんだそうです。そのために手を貸して貰いたいと、そう云う——」

「それ、かなり胡散臭くないですか？」

「僕もそう思いましたがね。話半分としてもかなり怪しいですわな。でも、善い人なんですよ合羽橋の三芳さん。まあ、その話が本当だとすれば、ただ警察に届けければ済むだろうって話なんでしょうけど、どうもそうはいかない理由があつたようなんです。そこら辺がどうにもまた、怪しいんですけど」

「そもいかなない理由と云うのは、その依頼人の方にあるんですか？ それとも持ち主の方ですか？」

「両方でしょうなあ」

益田は帳面を出した。

「まあ、依頼人と云うのは、その不正に加担した過去があるようなんです。だから表沙汰にはしたくない。で」

「で？」

「本当の持ち主と云うのはですね、高貴なお方だと」

「高貴？」

豪く時代掛かったもの云いである。

「今の世の中で高貴と云われても——華族制度も廃止されてますし、日本には貴族もいません。旧幕時代に身分が高かったと云うことですか」

「そりや知りません。僕は、まああまり深く考えずに偉い人なんだろうなあくらいに思っていました。考えてみれば社長さんやら政治家やらを高貴とは謂いませぬ。政治家なんて寧ろ俗物の見本みたいなもんですからね。そうしてみると微妙に判り難いですけど、先祖がお殿様だったとか位の高い坊さんや公家だったとか、そう云うことなんですかね？ 合羽橋の三芳さんはまったく疑問に思わなかつたそうで、なので僕も何にも考えませんでしたけど。まあ高貴なお方なのでこちらも警察はご遠慮したいと。何ごとも波風立てずに隠密に行きたいと云う——」

「波風立ちませんか？」

「まあ、その不正に所持している宝石をですな、こつそり偽物と掘り替えて、本物を持ち主に返しちやえば、立たんのではないですか、波も、風も。だって正當な持ち主に戻る訳だし、悪漢の方も、気付いたとしたってどうしようもないですよ。元元不正に入手したもんなんだし。で、気付かずに売っ払おうとしたとしても売れやしませんよ。偽物だ、こりゃあ一本取られた——で終わらせるしかないでしょう」

「そうですかねえ」

「そう巧く行くものだろうか。」

「状況が判らないので素直にそうですねと首肯うなずけないですよ。その、模造宝石の制作を依頼したと云う人は、信頼出来る人なんですか？ 不正略取に協力したと云うのなら、あまり真つ當なお仕事をしている人とも思えませんけど、その合羽橋の」

「三芳さん」

「三芳さんとは旧知の仲だった、と云うことですか」

「能く判りますねと益田は前髪を揺らした。」

「だって、腕を見込んだと云うのなら、そうなりませんか？ 幾ら食品模型の腕が良くて、普通は模造宝石を作らせようとは思えませんよ。益田さんの云う通り、蠟で宝石を作らせようとは思わないです。見た目そっくりに出来てもバレます。なら、前職あつてこそその依頼じゃないんですか？」

「正にその通り。ご明察です。三芳さんに仕事を依頼したのは久保田悠介さんと云う人なんですがね。ええと、その、何て名前でしたっけね。合羽橋に、河童のお寺があるでしょう。曹源寺そうげんじでしたっけ。あそこのお寺の、脇だか裏だかに住んでいた人らしい。まあ、三芳さんの幼馴染みですかね」

「はあ」

固有名詞や個人情報ばかり出されても、出来ごとの輪郭自体が曖昧あいまいなので正体が掴つかめない。

「久保田さんと云う人は、戦争前に千葉の方に宿替えしゆくがへしていて、漁業関係の仕事をしていたようなんですが、南方戦線で右腕みぎうでやられちゃったようで」

「傷痍軍人しょういなんですか」

「ええ——まあ。で、復員しほらして暫くは東京で管巻くだまきいてたようなんですわ。ま、やさぐれますよ。戦争つてのは色々奪うばいますからね。五体満足で生還せいげんしたって元通りの暮らしは出来ませんしね。況まてや——」

あ、また脱線だつせんしましたねと益田は自おのが額おでこを叩たたいた。

「まあ、そこで久保田さんは、同じ部隊ぶたいにいた戦友せんゆうに唆そされて、良からぬことに手を染めた訳わけですね」

「それが宝石の略取、と云うことですか？」



「そうなんですよな。しかし、所詮しよせんは無頼の集まりですからね、仲間割れか何かしたんでしよう。その寶石は悪い仲間の一人が何処どこかに隠して独り占めしてしまったようなんで。それで紛乱ぶんらんと揉めたようですが、久保田さんは元より悪事に加担することには消極的だったようで、すぐに諦めましてね、そいつらとは縁を切つたらしい」

ところが、と云つた後、益田は手を挙げて団子をもう一皿注文した。

「敦子さんはどうです？ 暑いですから掻き氷とかの方が良いですかね？」

「結構です。まだ食べ終わつてませんし、それよりも先を話してくださいよ。まあ、記事は書きちゃつたから時間はあるんですけど——」

敦子は、予定通りなら今頃は房総半島の真ん中にいる筈だったのだ。連載記事の取材同行である。

しかし。

俗に云う第五福竜丸事件に進展があつたため、敦子は千葉の取材を同僚に代わつて貰うことにしたのだつた。取材と云つても付き添いに過ぎなかつたし、緊急性のあるものではなかつたからだ。

第五福竜丸事件とは今年の三月、遠洋鮪まぐろ漁船である第五福竜丸が、マーシャル諸島近海で操業中、同海域にあるビキニ環礁で行われた米国の水爆実験——キャッスル作戦に因る降灰——所謂死の灰——を浴び、被曝ひばくしてしまつたと云う事件である。

一昨昨日、被曝に依る健康被害のため入院加療していた乗組員達の面会謝絶が解除され、記者会見を開く運びになったのだ。

事件発生以来、敦子はずつと第五福竜丸関係の記事を担当し、取材を続けていたのだ。外す訳にはいかなかった。

敦子はすぐに記事を書いた。

敦子の編集する『稀譚月報』は科学雑誌である。だから政治的、思想的には中立であるべきだし、予断や偏向は許されない。それでも記事は反核、反原子力の論調とせざるを得なかった。この事件は本邦が被った第三の原子力災害と捉えるよりなく、ならば他に書きようもない。新聞を始め総ての報道が足並を揃えていたようだ。

今日は原水爆禁止署名運動の全国協議会結成大会が開かれた。敦子は事前に事務局への取材をしている。

原水爆禁止運動はこの後も広がるものと思われた。

ただ、そうした民間の動きに較べ、政府の反応は鈍い。少なくとも敦子の目にはそう見える。米国との間で調整がなされているからだろう。

米国側は、高額な賠償金を提示しはしたものの、船員の体調不良を放射線症と断定することは出来ないと言う見解を早急に示しているようだった。反核と云うより、反米感情が高まることを畏れているのだろう。

一方で、日本側の思惑はまた別のところにあると云うのが敦子の感触である。講和が成つて、国内での原子力研究が解禁された。第五福竜丸が被曝したのと同じ月、原子力研究開発予算が国会に提出されている。

この国は、原子力の平和利用——産業化に舵を切ろうとしているのだから。

敦子は複雑な想いに駆られる。

仮令大量殺戮兵器のために開発された技術であつても、技術は技術として評価すべきだ——とは思ふ。その技術をして社会に役立てることが出来るのなら、それも結構なことだろう。

でも——。

使い熟せるのか。

キャスル作戦にしても、実験用の水素爆弾が予想を遙かに上廻る威力だったからこそ、斯様な惨状を招いてしまったことは疑いようがないことである。爆弾は破壊力が大きい程良いのかもしれないが、兵器でなかった場合、そうした不測の事態に対処出来るのか。

まだ能く解らないものを使えるのだろうか。

例えば、幼児でも自動車の運転は出来るだろう。

だからと云つて幼児が自動車を運転したりしたならば、事故を起こす確率はかなり高くなる筈である。簡単に大惨事を招き兼ねない。事故が起きてから手を講じても遅いのだ。取り返しはつかない。自動車の運転が法律で厳しく規制されているのは、その所為だろう。それでも現状、免許を取得した者だけが運転していると云うにも拘らず、事故は幾らでも起きているのだ。ガソリンを燃やして車輪を回すだけの単純な機関すら、人はコントロール出来ていないのである。

これは敦子の私見に過ぎないのだが——原子力と云う自動車に乗るのに人類は未だ未だ幼過ぎるのではないだろうか。免許取得の資格が手に入るのは、もつとずつと未だのことだろう。資格が手に入ったところで、免許を得るための試験はかなり難易度の高いものとなるだろうと——敦子は考える。

ただ爆発させるだけでも制御不能なのだから。でも、この国はそう考えていないのかもしれない。

ならば、国は原水爆禁止までは是としても、反核となると好ましくない——と云う立場なのかもしれない。

慥かに原子力技術自体が悪い訳ではない。使えもしないものを使えると過信すること、使つてしまふ軽率さこそが大きな問題となるのだ。

その方針の是非は兎も角、いづれ民意世論とは確実にズレている。

世間は真理では動かない。それは概ね雰囲気おおむで動く。だがその無責任な世間こそが正論を吐くことも多い。だがそうした世論は、どれだけ正しくとも正しいだけだ。世間は社会を動かせない。

敦子は暗澹あんたんたる気持ちになる。

何かに不満がある訳でも不安がある訳でもない。自分の立ち位置が定まらないことが、もどか 抵牾しいのである。

ここ数日、そんなことばかり考えている。

上の空ですなあと益田は云う。

「あれですか、その、最近はあれ、原水爆禁止的なもんを取材してる訳ですか、敦子さんは」

ええまあ、と曖昧に答えた。

話がでかいなあと云って益田は新しい団子もてあそを弄ぶ。

「深刻な問題ですしねえ。爆弾なんざ、ないにこしたことはないんですけど、あの原子マグロってなあどうなんです？ 放射線症が感染すると云うのはデマだと知ってますけども、魚なんかはいかんのですか」

第五福竜丸の被曝を受けて、当該海域で獲れた鮪まぐろを廃棄する処置が取られた。それらは原子マグロ、原爆マグロなどと呼称され、騒動にもなっている。

「本当に放射線を浴びた魚であるなら、食用にするのは危険だと思えますけど——程度にも依るんじゃないですか。鮪に関しては風評被害も多いと聞きますし。きちんと検査することが肝心だと思います」

つまらない回答だと思うが、本当だ。

世間は一時期、鮪自体が毒だとも謂うかのような論調だったのだ。

世間の吐く正論は、時に行き過ぎて暴走する。

マグロは旨いですからからねえと益田は上滑りした感想を云う。多分、益田もそうした社会問題に就いて深刻に考えてはいるのだろうし、一家言持っているのだと思う。しかしそれを敦子なんかに開陳することに意義を感じていないのだろう。

「まあ、それに較べれば僕の話は、その、何だ、小さいですよ。原水爆問題に比するに、屁みたいなもんです。でもですね、僕にしてみりゃ屁は屁でも、ただの屁じゃなく、河童の屁ですよ」

「意味が解りませんよ」

殺人的に臭い訳ですと益田は云った。

「また——そんな」

「とことん下品ですよ。尻だの屁だの。でもそう云う感じの話なんですから仕方ないです。で、まあそのマグロも無関係じゃないんです」

「え？」

「合羽橋の三芳さんに模造金剛石の制作を依頼した河童寺の裏に住んでた久保田さんはですね、その、今回の原子マグロ騒動で職を失った人でもあるんです」

「そうなんですか？」

そう云えば千葉で漁業をしていたと云っていたか。

「隻手ですし、遠洋漁業船に乗ってたつてこたあないんでしようが——いや、どんな仕事をしたのかまでは知りませんが、ほら、マツカーサーラインが廃止されたんで遠洋漁業の業績は伸びてる訳でしょう。これからつて業種ではあるでしょうよ。それに、まあマグロは高価ですからね。儲かる。それが今回の騒動でもつて、どかどか廃棄してるでしょう。影響はあちこちに出ますよ。魚河岸だつて小売り業だつて、大迷惑ですわ。敦子さんの云う通り、ちゃんと調べればいいんでしようけど」

調べたつて信用しませんやねえと益田は云つた。

「怖いつたら怖いんですから。でも、ソ連やらアメリカやらをどうにかしようつたつて、その辺の一般人には何も出来ない訳で、だからマグロ辺りに照準を合わせるんでしようなあ。まあ、放射能の雨も降ろうつてご時世ですから、風評も誤解も広がる訳で、一概にいい加減にしろとは云えませんかね。でも、それで生活が変わつちゃう人もいるんですわ」

変わっちゃったんですよ久保田さんとは益田は一瞬陰鬱いんうつな表情を見せた。

「それで失業しちゃって、路頭に迷ったんです久保田さんは。そこで、まあ思い付いたのが——模造宝石の一件で」

「判らないではないですけど、模造宝石を作ってもどうにもならないんじゃないですか？ 本物と偽って売ると云う訳じゃないんでしょう？」

そんなことありませんと益田は云った。

「いくら何だって、そんなもの売ったらすぐに足が付きますって。食品模型のマグロは能く出来てますけどね、でも間違つても喰くわんでしよう。どんなに精巧に出来てても、触った途端に判るでしょ。喰つたところで口に入れればすぐ判りますわ。蠟ろうですからねえ。宝石だって変わらんですよ。見た目で違いの判らんような素人に売り付けたところで、まあ手にした段階ですぐバレるでしょうしね。それ以前に、三芳さん曰いわく久保田さんは根が善人なんだそうですわ。ですから」

「その、悪い仲間が持っている本物と掬り替える——って話なんですよね。そこまでは判るんですけど、掬り替えた後、どうするんです？ 本物の方を売ると云う話じゃない訳ですよね」

「ですから」

持ち主に返すと云う話なんですよと益田は云う。



「何だか判りませんが警察沙汰にしてくれない身分の高い人に、返還すると云うんですね」

「それ、親切ですよね？」

「親切ですなえ」

「親切は生活の足しにはならないですよ。その久保田さんは、失業して暮らしに窮した揚げ句その模造品の工作を思い付いたんですよ？」

「目先の金よりも恩を売りたいと云うことですよ。なんせ元の持ち主は」

高貴なお方——か。

「つまり恩を売ればその元の持ち主が何かと便宜を計らってくれる筈だと、そう云う算段ですか？」

「そうだったんでしようねえと益田は団子の串を啜くわえたまま往来の方を見た。

「違うんですか？」

「違わんですが、そう巧くはいかなかつた訳ですよ。三芳さんが依頼を受けたのが一月前ひとき。でもって何とかかんとか拵こしらえて、久保田さんに渡したのが半月前。代金は出世払いと云うこととして、礼金として五十円貰ったそうですな。こりゃ、原価割れです。で、まあそれから一週間くらい後、久保田さんが——」

死体で発見されたんですと益田は云った。